小篇四ツ

藤田德太郎

老僧

春の午後の暖かい太陽の光りをあびながら年老ひた僧侶が一人野道を歩いてゐた。白い頭髪が長くのびて所々掻き裂きの出來てゐる衣は色があせて薄汚なかつた。「岩間の水もぬるんだ、風も和いだ。ぢつと耳をすましてゐると鳥の音も耳に通ふやうだ。」

老僧はそうした古い歌にでも使はれるやうな言葉を經文でも讀むやうな調子でつぶやきながら、野道を歩いてゐた。全くその言葉のやうに和らかい風がそよ〳〵と頰のあたりを吹きすぎて快よい暖かい觸感を與へるし、耳をすませると雲雀の愉快そうにさへづる聲が右からも左からも、又空からも聞ゐて來るのである。廣々とした野原は一面に薄く草が萠ゐて綠色と枯草色とを織り合せた美くしい模樣をつくつてゐる。右手には森が、左手には薄く山が霞んで見ゐる、すべてが春だ、――杖を片手に、もう一つには托鉢の鉢を持つて薄汚ない風をした老僧は、「春」の喜びをしみ〴〵と身に味ふかのやうに、ゆつくりと足を運ばせて居るのである。

――ふと愉快そうに聲高く叫ぶ子供の聲が起つて、バタ〳〵こちらに走つて來る足音がした。眠つてゐる

かのやうにうつとりした樣子で歩んでゐた老僧は驚いたやうに顔をあげて前を見た。とそこには十二三を頭に五六人の色の黑い腕白らしい顔をした子供が見ゐた。子供達は老僧の所迄走つて來ると皆その廻りを取り卷いてその中の一番大きいのが

「おぢいさん！一所に遊ぼう。」

と云つた。其をきくと彼は子供のやうにほゝ笑んで

「ほう！皆集まつてゐるな、久し振りに鬼ごつこでもして遊ぼうか。」と云ひながら、いそ〳〵とそこに杖や鉢や頭陀袋などを置いた。

「そんならおぢいさんが鬼だよ。」

「よし〳〵鬼になつてやる。」

彼がこう云つて首を振ると、年かさのが、

「さあ皆逃げるんだ。」

と合圖して子供達はばら〳〵と散つて行つた。老僧は草叢に腰を下して神妙に眼をつぶつてゐた。やがて

「もう、よーし。」

といふ少さい聲が物蔭から聞ゐると、彼は眼を開いて立ち上りながら、あたりをきよど〳〵見廻した。が直ぐについ近くに積み重ねてある枯草の陰に着物の裾を見出したので

「そうらそこに居るぞ、居るぞ。」

と云ひながら近寄つてゆくと、少さい姿がその後から現はれてばた〳〵逃げ出した。けれども苦もなく捕

まへられてしまふと、こゝの草叢やかしこの木蔭などから叫び聲をあげて、子供達は皆集まつて來た。
「ひどいや。俺ばかし見つけるんだもの。」
捕へられた年長の一番惡太郎らしいのがこう不平をもらして
「もう一度鬼になつておくれよ。」
と老僧に云つた。
「よし〳〵。」
老僧はうなづいて、手で眼を塞いだ。
「見てはいやだよ。しつかりつむつてゐなきや。」
惡太郎がこう云つて馳け出すと他の子供達も急いで思ひ〳〵の隱れ場所に身を潛めた。やがて誰か合圖をしたので、老僧は眼をあけて暫らくそこらを探してゐたが忽ち、茅のこんもりと高く伸びてゐる中に一人見出して、今度は稍々脊のひくい、眼だけが飛びはづれて大きい兒を捕へた。
「おぢいさん！俺の代りに鬼になつておくれ。」
子供達が皆集まつて來た時、捕へられた兒がこう云つた。
「ハ、ハ……又鬼か。わしは鬼の方が面白うていゝ。」
愉快そうに老僧が笑ふと、その兒も大きい眼を輝かして笑つた。
「こいつ俺の眞似をしやがる。人の眞似をするな。鬼になれ！」
その時年長のが。をどかして、さも憎々そうにその兒を睨みながら怒鳴つた。

「まあそう怒らんでもいゝ。わしが鬼になつてやるから。」

老僧はやさしくなだめた。

「いやだい。同じ者が鬼になつてゐてはちつとも面白くないもの。」

子供の國の強者はこう主張して、眼の大きい兒を威嚇するやうにぢつと睨みつけてゐた。睨まれた兒は凋(しぼ)れかへつてうつむいた。老僧は何う云つて二人を宥めたらいゝのか分らなかつた。今迄の愉快な氣持ちに引き返へて耐らなく淋しい氣持がその心を蔽ひかけてゐた。やがてふと心づいて袂から紙に包んだ菓子を取り出して、

「そう〳〵さつき貰つて來た菓子があつたな。……是をお前達に分けてやるから、もう喧嘩をするのじやない。仲よく一所にたべるのだぞ。」

そう云つて、四つづゝ五人許りの子供に分けてやつた。子供達は其を泥まみれの汚ない手に掴んで、直ぐにむしや〳〵食べ初めた。もう早春の陽は殆んど沈む許りに傾いて、左手の高い山の後の空には濃い夕闇が魔物のやうに押し迫つてゐた。

「こりや遲くなつた。それじやわしは歸るから。皆喧嘩をするのじやないぞ。」

こう云つて老僧は慌てたやうにそこに置いてあつた頭陀袋と杖を取りあげて街道の方に歩き初めた。

平原のかなたには鮮血のやうに赤い太陽が燦爛たる光線を、薄闇に蔽はれてゐるこなたの山々に投じて、丁度海上を照明する探照燈のやうであつた。廣々とした田野を渡つて黄金色に輝く光りが一直線に飛んで來る。其を受けた土地の面は高低に應じて或る所は銀色に輝き、或る所は黑い陰を印してゐる。同じ探照燈の

光りは空中にも向つて一面に金色の紛を振りまいたやうである。その光明に對して暗は戰ひを挑むやうにじり〳〵と攻めよせてはや輝やきの部分を次第々々に蠶食して行く。太陽は其が口惜しくて耐らないかのやうに身をぶる〳〵震はせて、更に血みどろになつた身体から黄金の粉を四方に散亂させるのだが、しかも遂に敵し難くて段々退いて行く。

老僧はその太陽の僅かに殘つた光りに照らされながら道を辿つて行つた。老僧の心は愉快だつた。無邪氣な子供と一所に遊び戯れた事が愉快だつた。――ほんとに子供は罪のないものだ、あゝして何も思ふ事もなく子供と一日を遊び暮す事が出來たら何んなに愉快だらう。世の中で一番清いものは子供である。年を取る程人は汚ない事を一つづゝ覺えて來る。人はいつ迄も子供のやうな心でありたい。――そんな事を思ひながら野原を横ぎつてゐる小川の傍へ來た時、老僧はふと手に鉢を持つてゐない事に氣がついた。

「何か忘れたやうだと思つたら、そう〳〵鉢を忘れたのだな。」

かう獨言を云つて、思はずくす〳〵笑ひながらもとの所にとつてかへした。とその方面から子供達の聲高く罵り騒いでゐる聲が聞えた。

「よこせつたらよこせ。」

「いやだい！自分も貰つたくせに。」

「俺のはもう無くなつたんだ。さあ出せ。」

「嘘を云へ。そこに持つてるじやないか。」

「やかましい！少ひさい奴が俺と同じやうに貰ふなんて生意氣だ。何うしても出さんか。」

「人のものを……誰がやるものか。おぢいさんに云ひつけてやるぞ。」

「云ひつけてやる？、馬鹿あ云ふな。おぢいさんはもう居ないや。何うしても出さなきや……見てゐろ！」

續いて毆る音泣く聲が聞ゐた。老僧は驚いてそこに走つて行つた。

「これ〳〵何をするのじや……やめんか。やめんか。」

きれ〴〵に彼はこう叫んだ。子供達は老僧の姿を認めるとばら〳〵と四方に逃げ出した。叩かれて泣いてゐた眼の大きい兒らしいのもその中に交つて走つた。そして直ぐに夕靄の中に消ゐて後には只灰色の闇と靜寂とのみが殘つた。老僧はもぞ〳〵とその邊を手探りで、やう〳〵一つの鉢を探し出すと、其を手に持つて重い慰められない裏切られたやうな心を抱いて、暗い道をとぼ〳〵歩ゐて行つた。

蜘蛛

或る日私は彼を誘ひ出して裏の山へ登つた。夏の午後の日がじり〳〵照りつけて木がなく草のまばらな此の山は耐らない程暑かつた。

「おい、しばらく休もうじやないか。」

二人で默つて坂道を登つてゐたのだが、私は突然彼にこう聲をかけた。丁度そこの崖のかげに近所の悪戯小供が作つたらしい木片や茅のやうなもので出來てゐる小屋を見出したので、その中に入つて暫らく暑さを避けやうと思つたのである。

「よからう。」

彼が斯う答へたので、私はその狹い小屋の中に入つて腰をおろさうとする拍子に、隅の方に張つてゐる蜘蛛の網が顏にかゝつた。私はあはてゝ頭や顏をなで廻して其を取らうとした。すると彼は笑ひながら、

「罪な事をしたね」

といふ。私は未だ網の殘りがねば〳〵くつついてゐるやうな心持の惡さを感じながら、さう云つた彼の言葉を變に思つてきいた。

「何故だい？」

彼は顏を赤くして益々笑つた。

「何故だい？」

「だつて、君――そりや夫婦蜘蛛なんだよ。」

少しどもるやうにして腑に落ちない事をいふ。特に「めやう」といふ音に變なアクセントをつけた。

「何うして？」

私は又斯うきいた。すると彼はもどかしさうに、そして何んだか云ひ憎さうに答へた。

「蜘蛛が二匹そこにゐたんだもの――夫婦蜘蛛だらうじやないか。」

彼は私の氣付かなかつた蜘蛛の巢を、そこをのぞくと直ぐに、しかも蜘蛛が二匹居る事迄知つてゐたのである。

「そうかい。――眼の早い男だな。」

私は夫婦蜘蛛とは面白い呼び方だと思ひながら、隅の方を氣をつけて見た。併し蜘蛛は一匹しか見出す事

が出來なかつた。

「一匹しかゐないせ。」

「もう一つは驚いて逃げたんだらう。不人情な奴だね。」

今度は眞面目な顔をして云つた。私はその殘つてゐる蜘蛛を手を出してつかまへやうとしたが、ちつとも動かなかつた。取りあげて見ると死んだ蜘蛛であつた。

「おい、是は蜘蛛の死骸なんだよ。生きてゐるんじやないのだよ。」

私は手の掌にのせて、彼の前に差し出して其を示した。彼は氣味惡そうに其を見て、

「さうかい？死んでたのかなあ？」

と驚いたやうにいふ。

「あれは夫婦蜘蛛じやなくて、仇同士だつたのだ。そしてこいつが敵の爲めに殺されたのだよ。きつとそうだ――一体何うして夫婦蜘蛛だなどと思つたのかい？」

私は彼の顔をしげ〳〵見ながらきいた。併し彼は默つて答へなかつた。

「ね？何故？」

私は又促がすやうに訊ねた。すると彼は氣まりが惡そうに俯向きながら、

「だつて二匹居たんだもの。」

とつぶやくやうに云つた。

それは彼が十六の夏――私の妹の、その頃小學校の六年に通つてゐたのに戀をしてゐると友達の間で評判

してゐた時の事であつた。

密柑の色づく頃

三吉の村にも久し振りに芝居がかゝつた。男女優合同といふ觸れ込みで、その女優といふ看板が村の若い者の心をそゝりたてゝ、其に近來まれな豊年だといふので大變な人氣である。今年十三になる三吉も幾らかの小遣錢を貰つて一人で芝居を見に行つた。小屋掛の芝居小屋には何々より何々丈へと染めぬいである色のあせた幟が四五本立つてゐるきり、裝飾らしいものもなくてみすぼらしい程淋しかつた。併し中に入つて見ると割れるやうな大入りで莫蓙の敷いてある土間には、斑に白粉をつけて、黑い日にやけた襟首に眞赤な半襟を着物からずつと上の方に出してゐるやうな女や、瓢單から盃に酒をついでぐい〳〵飲みながら、近所に坐つてゐる若い女に何かゝらかいかけては、あはは……と笑つて又ぐいと飲む男やが一林に滿ちてゐた。三吉が中に入つた時は可成り遲かつたので一番後の隅の方にぼんやり坐つて一心に芝居に見入つた。他の遊び友達は皆舞台の直ぐ前に陣取つてがや〳〵騷いでゐたが、三吉は前にその仲間入りをしやうとも思はなかつた。其よりも舞台の方に直ぐ氣を取られてしまつた。舞台では女が惡者から捕へられてゐたのを、武者修業らしい男が救ふといふ所らしく、烈しい立廻りがあつて惡者は皆逃げてしまつた。台詞(せりふ)は見物席の騷音の爲め後からはよく聞き取れないがふと女の「ほんにありがとうございますわいなあ」と云つたのが聞へた。そしてなまめかしい態度をしながら、武者修業者の傍に近よつた「たまらねね――」誰か土間から黄色い聲でそう叫んだ。と同時に見物人は皆どつと吹き出して、笑聲が暫らく場内に渦を卷いた。――三吉はぼんやり芝居を

見てゐた。そして淋しい、といふよりは何か知ら物足りないやうな、物欲しいやうな心持が胸に一杯になつてゐた。舞台の女は一座の花形で一番の人氣者であるといふ事は若い者の話や噂で知つてゐた。

「矢張りあいつはうまいや。」

「それよりかばかに色氣のある顏をしてゐやがる。村にはあんな別嬪は居ねいぜ。」

「おら今日で三日毎日あいつの御面相を拜みに來る。」

こんな會話を聞きながら三吉はその舞台の女にぢつと見入つてゐた。顏をまつ白にぬつて、文金高島田の鬘をかぶつて、派手な模樣の奇麗な着物を着てゐるその姿が大變美くしく見えた。髮の縮れた顏の眞黑い汚ない村の女に較べると、まるで別の世界の女のやうに奇麗だつた。三吉は耐らない程の淋しさを覺えながら只女の動作に注意を集めてゐた。

——芝居は終つた。秋の日はもう大分傾いて、暮れるに間のない時刻であつた。三吉はがや〳〵騷ぎながら歸へつて行く大勢の人から離れて、只一人たんぼ道を辿つた。あたりはうす寒い程暗くなつてゐて、畑の向ふの野原に立つてゐるお宮の石の鳥居だけがはつきり見えた。それをぢつと見つめながら歩いてゐる、彼の胸の中には耐らない程のあこがれ心地が一杯になつてゐて、眼の前にはあの女の白い顏がちら〳〵浮んだり消えたりするやうであつた。たんぼ道のつき當つた所に土塀で圍まれた家が一軒ひつそりと立つてゐた。三吉はその塀の横を通る時ふと中から道端につき出てゐる一本の木に氣がついた。その枝には早や色づきかけた密柑が澤山なつてゐた。そしてその中に一つ極立つて黃ろい大きい密柑が薄闇の中に浮んでゐるのを見た。三吉は默つてそこにつゝ立つたまゝ、ぢつとその赤い蜜柑の色に見入つた。

偶然

「矢張りあなたでしたわネ。さつきお部屋の前でお目にかゝつた時には何んだか似た方のやうだけど、まさかと思つてたのに。」
「僕もうつかり見違へる所でした、あまりあなたの様子が違つてゐるものだから。」
「あなたゞつてあの頃とは大變變つてゐらつしやるのネ。おひげなんかはやして。」
「そりや變りもしませうよ。もう一年になるんだから。」
「そう——もうそんなにもなりますかね。私には未だほんの昨日の事のやうにしか思へないんですけど。お互ひに年を取りましたわね。」
「ハハ……未だそんな事をいふ年頃でもありますまい。時にあなたは此の頃何うしてゐらつしやる？」
「わたし？何うしてつて、相變らずよ。」
「じや矢張り一所にゐるんですネ。」
「エ、。」
「此の頃は少しは落ちつきましたか。」
「ホホ……そりやもうこんなに善く一所にゐるんですから。」
「そりや結構だ。それで僕も安心した。」
「ほんと？」

「ほんとうとも。」
「それを聞いてわたしも安心しましたわ。」
「お互ひに安心して結構だ。あの時は僕はあなたに腹を立てはしなかつたがいさゝか心外だつた。」
「結局矢張りお怒りなすつたのでせう？」
「とまでは行かないが、我ながら意氣地なしだと思つて情なかつた。」
「御免なさいネ、あれはほんのはづみだつたのですもの、ほんとに偶然だつたのよ。」
「偶然？そうかも知れませんね、一体あなたは僕とあれと何つちを餘計に愛してゐたのですか？」
「そりや……そんな事云へませんわ。」
「ぢや僕が云ひますがね――うぬぼれかも知れないが僕の方が餘計に愛されてゐると思つてゐた。」
「……」
「あの時――春でしたつけ、あなたの姉さんを加へて四人連れで櫻見に行きましたね。」
「エ、行きましたね。」
「あの小さい川を渡る時あなたはすこしよろけるやうにしてあれの手におすがんなすつた……。」
「……」
「あの時僕にはあなたの態度がわざとらしく思はれて仕様がなかつたのです。」
「あなたからのお手紙にもそうありましたわね。だけどその時書きましたやうに、決つしてそういふわけじやありません。ほんのはづみだつたのですわ。」

「そうかも知れない。併しあの時僕はあなたから心が放れずには居られなかった。」
「そんなものでせうね。」
「それに反してあの男はすつかりあなたの心を捕へてしまつたやうな氣で、あの時以後急にあなたになれ〳〵しくなりましたね。あなたも僕をはゞかつてあの男に近づくやうに思はれた。」
「わたしあなたにすまなかつたのですけど、あなたはあれから後といふものは急にわたしによそ〳〵しくなさる、何うにも仕樣がなかつたのですもの。」
「全く僕は男らしくなかつた。あの時僕は何んなに心の中では苦しんだ事でせう。」
「お察しゝますわ。わたしも苦しんだのですもの。でもほんとの事を云ひますと、到頭わたしの心はあなたを離れて、あの方の方に移つてしまつたのですわ。」
「到頭ではないでせう？あの時でせう？あれがあなたの手をしつかり握つたあの瞬間でせう？」
「……」
「わたしにはさう感じられた。だつてあなたの心は未だ動搖してゐたのだから。わたしもあなたに自分の心中を打ち明けなかつたし、あなたはわたしをより多く愛してゐたが併しあれも嫌ひじやなかつた。」
「だけど……」
「まあおきゝなさい。あなたの心は丁度均衡が取れないで動搖してゐる天秤棒のやうなものだ。そりや私の方に少し傾いてゐたかも知れないが、併し向ふの方にも何かの機會で少しでも重さがませば直ぐに又その方に傾いてしまふ。その時あの男が機會を捕へたのだ、いやあなたが機會を與へたのだ。」

「まあ……」

「そりやあなた自身には何んの罪もない。併し兎に角あなたが機會を與へた。あの男は直ぐにそれをつかまへた。動搖してゐたあなたの心はその瞬間に一定の方向にきまつてしまつた。」

「考へて見ればそうかも知れませんわね。」

「そうでせう？だからあの瞬間、あの男があなたに好意を見せた瞬間あなたの心はすつかりあの男の方に傾いてしまつた。あるべき事だ。」

「あなたにはすまなかつたのですけど。」

「偶然が必偶になる。あなたがあれを愛してその手の中に陷つてしまつたのは必然的に起らなければならない事だ。」

「未だわたしに腹を立てゝゐらつしやるのネ。」

「ハハ……いや僕はもうすつかり落ちついてゐる。過去のいたでも殆んど癒えた。あなたを怨んじやゐないから安心なさい。」

「ほんと？ほんとならわたし何んなに嬉しいか知れないわ。わたしはあれから隨分煩悶したのよ。あの後のわたしの手紙でお察しがつきませう。」

「その煩悶は當然受けなければならない事です。偶然に一歩を先んじたが爲めに必然的に足を踏む事になつた。」

「でもその苦しさも矢張り年が立つと薄らいで來るものですね。今では霧のやうなぼうとした記憶として殘

ってゐるだけですわ。もつともあなたの事は忘れやうたつて忘られはしないんですけど。」
「そして今はもうすべてが幸福に行つてゐるわけですネ。」
「まあ無事に……」
「そうでせう、一体愛なんて偶然的なものですよ、偶然に夫婦になれば必然的に幸福が生れる。」
「そんなに輕蔑なさらないでもよござんすわ。」
「輕蔑じやない。是が僕の戀愛哲學なんですよ。――で、いまあなたお一人？それとも御一所？」
「役所が急がしいものですからわたし一人で參りました、子供か病氣をしてゐるやうですから。」
「おや〳〵いつの間にか子供までつくつてゐるのですネ。」
「仕方がありませんわ。」
「それも偶然が生んだ必然といふのだらう。僕は明日歸る積りです。あなたが來てゐるのに僕が一所に居ると惡い。」
「まあ、そんなにお逃げなさるには及ばないでせう、矢張りお怒りなすつてゐらつしやるのネ。」
「いや怒つちやゐないが氣持が惡いから。全く僕の心は落ちついてゐるのですよ。それじや是で失禮します、長い事立話をした。」
「もう少し――」
「いやもう話さない方がお互ひの爲めに好い、折角なほつてゐる昔しの古傷を洗ひ立てるにも及ふまいから。御免なさい。」

「それじゃ仕方がありませんわ。御免下さいお身体を御大事に遊ばせ。」